

障がいを持つアーティストが教壇に！ 子どもたちと学ぶ特別授業

Recart導入企業である、株式会社エール所属のアーティスト社員・永岡里佳さん。普段は、カレンダーの作成や会議室に展示するアートの制作をしている永岡さんですが、今回、東京都内の小学校で特別授業を実施。同じ絵を見ても、浮かぶ感想や表現は一人ひとり違う——アートを通じて多様性に触れるその時間は、教室に静かな驚きと発見をもたらした。

講師
永岡 里佳 さん

本企画は、企業に雇用された障がい者アーティストが、その才能を活かして教育現場で授業を行う新しい取り組みです。児童たちに対しては、正解のないアート鑑賞と創作を通じて「同じテーマでも表現は一人ひとり違うこと」を体感させ、違いを価値として捉える『多様性理解と非認知能力の育成』を目的としています。同時に

社会に対しては、現在の障がい者雇用において「農園型」など隔離された雇用が一人歩きする現状に一石を投じ、「障がいを持つ人々が自身の才能を最大限に活かし、雇用元企業のCSRや社会に直接貢献できる」という新しい社会インフラのモデルケースとなることを狙いとしています。

ながおか・りか
株式会社エール所属のアーティスト社員。
ADHD（注意欠陥・多動性障がい）の特性を持ちながら、30年以上の創作活動歴を持つ。落ち着いた色合いと丁寧な描写で、見る人が安心できる優しい表現が特徴。現在は社内展示絵画やカレンダーイラストなどの制作を通じ、同社の企業価値向上に貢献している。

生徒のみなさんの
感想
「明るい」「楽しい」「ハッピー！」

描いた人の気持ちと、見る人の感じ方。
その違いがアートの面白さ



授業はまず、永岡里佳さんの自己紹介から始まった。「私は絵を描くことを仕事にしているアーティストです」——株式会社エールに所属し、自身に精神障がい（ADHD）があることも、子どもたちに自然な言葉で伝えた。

その後は、永岡さんが描いた作品を鑑賞する時間へ。赤や黄、ピンクが弾けるような1枚目には「楽しい」「花火みたい」、黒や赤、灰色が重なる2枚目には「怖い気持ち」「岩みたい」と、子どもたちは自由に感想を口にしていく。さらに波打つ層が印象的な3枚目では、「天気みたい」「虹みたい」など班ごとに多様な解釈が飛び交った。

「絵を描いた人の気持ちがあって、見る人の感じ方がある。それが絵の面白いところだと思っています」——永岡さんのその言葉の通り、教室には一人ひとり異なる感想が広がっていた。



先生のタイトル
「かなしい」
黒・赤・灰色が重なる2枚目は、沈んでいく感覚や、出口のない感情を線と色で表現している。

うまく言えない気持ち
「生徒のみなさんの
感想
「怖い」「暗い」

先生のタイトル
「うれしい」
赤・黄・ピンクが弾けるように広がる1枚目。永岡さんは、「気持ちが弾けるエネルギー」を表現したという。



先生のタイトル
「たいくつ」
波打つ層が印象的な3枚目。永岡さんが描いたのは、「どこにも向かわない退屈」の感覚だ。

ふわふわ
「生徒のみなさんの
感想
「柔らかそう」





子どもたちは思い思いに手を動かし、それぞれの感情を色や線で表現していった。虹やハート、大胆に重ねられた色彩、コンパスで描かれた円——45通りの感性がキャンパスの上に広がる。

くじで引いたテーマを、 自分だけの色と線で

くじで「楽しい」「びっくり」「ドキドキ」などのテーマを引き当てた子どもたち。クレヨンやコンパスを手に、教室には思い思いの表現が広がった。コンパスで円を描いてほかした作品、黄色の背景に赤いハートを描いた作品、虹や太陽で感情を表現した作品など、同じテーマでも表現はさまざま。正解のない創作の時間に、子どもたちは迷うことなく夢中で手を動かしていた。



45枚の葉が集まって、 世界にひとつの銀杏の木に

今の気持ちを描いたそれぞれの作品を、銀杏の葉の形に切り取って貼り合わせていく。黒で大胆に塗られたもの、黄色を丁寧に重ねたもの、ハートのモチーフが描かれたもの——好きな場所へ一枚ずつ貼りながら、45人それぞれの感性が永岡さんの描いた大きな銀杏の木へ重なり、世界にひとつだけの作品が完成した。



INTERVIEW



講師

株式会社エール
アーティスト社員

永岡 里佳 さん

絵を描くようになったのは、幼稚園の頃のことです。お絵描きの時間に、隣の子がクリームソーダの絵をとっても美味しそうに描いていて、「私もあんな風に描けるようになりたい」と思ったのが最初のきっかけでした。小学校1年生のスケッチ大会では郵便局長賞をいただいて、そのとき審査をくださった先生の絵の教室に6年間通いました。中学・高校は美術部に入り、短大では絵画と彫刻を学びました。もともと絵だけではなく、工作やものづくり全般が好きな子どもだったと思います。

結婚や子育てで絵から離れた時期もありましたが、40代になって「本当にやりたいことを、もう一度ちゃんとやりたい」と思うようになったんです。アートの登録サービスを通じて株式会社エールと出会



い、昨年から所属アーティストとして活動しています。

私が絵を描きたいと思うのは、感情が大きく動く風景に出会ったとき。まずその瞬間を写真に残して、その場所を思い出しながら描いていきます。自分のイメージした色になるまで何度も絵の具を重ね、「ここはこの色だ」と納得できるまで描き続けます。会社に飾る作品を描くときも、それを見た人の気持ちが少しでも動いたり、リフレッシュできたりするような作品になればと思っています。

今日の授業では、子どもたちが迷わず手を動かしていた姿がとても印象的でした。私たちの世代は、周りを見ながら「こう描いた方がいいのかな」と、おそろおそろ描いていた感覚がありましたが、今の子

どもたちは人の目を気にするというより、自分の感覚のままに表現している。その姿を見て、時代が変わってきているんだと感じました。

私が子どもたちに伝えなかったのは、「自分がどう感じているか、どう思っているかを大切にしてほしい」ということです。全員に話せなくても、一人でもいい。自分の気持ちを安心して伝えられる相手がそばにいてくれたら、それで十分だと思っています。人に正直でいることは難しい。でも、自分に対してだけは嘘をつかないでほしい。自分の中にある感覚や気持ちを、ちゃんと自分自身で認識すること。それがいちばん大事なことだと思っています。

次回特別授業

| 日時 | 6月24日(水) | 場所 | 東京都の小学校

| 内容 | 「多様性と違いを学ぶプログラム」を3クラス合同で実施します。参加企業(アート導入企業)が3社あり、3名の障がい者アーティストが講師として参加する予定です。